

◎ 美術館情報

【各施設では、下記の特別展・企画展等のほか、常設展を開催しております。】

1. 愛知県陶磁美術館 (<https://www.pref.aichi.jp/touji/exhibition/index.html>)

1月12日(土)～3月24日(日)

開館40周年記念企画展：愛知県陶磁美術館の受贈外国陶磁コレクション選「共演！世界のやきもの」



開館以来40年、多くの方々から貴重なコレクションをご寄贈いただけてきました。現在まで、寄贈者309名、寄贈点数6,000件を超え、館藏品全体の8割以上を占めています。そのうち外国陶磁コレクションは寄贈者42名、計約2,200件を数えます。これらの作品は常設展示室での展示のほか、他館展覧会への貸出や外部から依頼された書籍・論文への画像掲載など、館内外の様々な分野で幅広く活用されています。本展では、中国陶磁を中心に、韓国・東南アジア・南アジア・西アジア・ヨーロッパ・中南米の作品約120件を一室に展示します。空間的にも年代的にも幅広く、原始古代から近代までの多種多様な作品をとりあげ、かたちやデザインなど小テーマごとにまとめ、世界のやきものの共通点やそれぞれの個性などにスポットをあてて紹介します。

2. 横山美術館 (<https://www.yokoyama-art-museum.or.jp/event/>)

1月11日(金)～5月19日(日)

企画展：「超技の世界 —瀬戸焼・美濃焼・名古屋絵付など—

明治・大正時代、驚くほどの技巧を凝らし多彩な装飾が施された陶磁器が制作され、海外へと輸出されました。特に、愛知、岐阜、三重の東海3県では、瀬戸焼や美濃焼、名古屋絵付、常滑焼、萬古焼など、様々な陶磁器が生み出され、当時の技術を結集させた器の数々は海を渡り、好評を呼んで多くの人に愛好されました。中でも、瀬戸や美濃という一大窯業産地の陶磁器は名古屋へと集積され、ここ名古屋を拠点として世界へと旅立ちました。明治中頃には、東海3県で日本の陶磁器生産額の半分以上を占め、最盛期の1929年には、7割を占めるまでになりました。本展では、明治・大正時代に瀬戸、美濃、名古屋で作られたやきもの他、東海地方の各産地で制作された陶磁器作品を紹介いたします。



3. とうしん美濃陶芸美術館【岐阜・多治見】

(<https://www.shinkin.co.jp/tono/news/pdf/20181205toshin.pdf>)

1月16日(水)～4月14日(日)

とうしんコレクション I

—所蔵品で見る美濃陶芸の世界— 『美濃茶碗展』

人間国宝荒川豊蔵・鈴木藏・加藤孝造など、当館が所蔵する美濃陶芸作家の茶碗の中から28点を展示します。

また、美濃陶芸永年保存事業選定作品も紹介します。現代陶芸作家の素晴らしい作品の数々をご覧ください。



4. 出光美術館【東京・出光】(<http://idemitsu-museum.or.jp/exhibition/present/>)

1月12日(土)～3月24日(日)

企画展： 染付 ―世界に花咲く青のうつわ

本展では、染付・藍彩(らんさい)など複数の技法におよぶ青いやきものを視野に入れ、深甚な影響力をもつ「染付」を、ひとつの世界言語としてとらえてみます。現代の国際社会では、思想や宗教の対立が広がる諸地域において、かつて人々は、共に青のうつわを求め、快晴の空や海を想わせる青のかがやきに、ひとしく心を酔わせていたのです。やきものという世界規模の文化が語りかけてくる言葉、多様性を示しながら、人々をひとつに結びつけた、懐深い美の物語を紹介します。

5. 京都国立博物館【京都・東山】(https://www.kyohaku.go.jp/jp/project/chi_ceramics_2018.html)

2018年12月18日(火)～2019年2月3日(日)

特集展示： 松井コレクション受贈記念「美麗を極める中国陶磁」

平成24年に、清朝陶磁を中心とした中国美術の蒐集家である松井宏次氏より、陶磁59件、考古13件、彫刻2件の計74件を一括でご寄贈いただきました。今回は、その受贈を記念し、ご寄贈いただいた作品を一堂にご紹介します。本展では、中国美術全般に興味を持って蒐集された松井コレクションの全容をご紹介するとともに、ご寄贈いただいた作品の中核をなす清朝陶磁をはじめとした中国陶磁の形状の豊かさや色彩の美しさを感じていただきたいと思います。また、中国陶磁だけでなく、あわせて展示する青銅器や金属工芸、彫刻などとともに、中国美術における造形美について触れていただく機会になればと思います。



6. 出光美術館 門司【福岡・北九州】(www.s-idemitsu-mm.or.jp/exhibition/)

1月11日(金)～3月24日(日)

企画展： 楽茶碗と京の華

侘び茶が創始された桃山時代より、和物のうつわが茶道具の主流に躍り出ます。その中でも筆頭格に挙げられるのが、京都で生まれた楽焼です。千利休の手ほどきを受けた長次郎が、土味を生かした手づくりのうつわを創り出したことから始まるこの楽焼は、その圧倒的な存在感より、現代にいたるまで、茶人たちを魅了し続けてきました。本展では、楽家代々の名品とともに、京の茶陶、さらには王朝の優雅をたたえる書画をあわせて展示します。